映画『ロリータ』を観て思ったこと、感じたこと
― *Lolita* ―

『ロリータ』
（Lolita）

制作　1962 年 6 月 13 日
日本公開　1962 年 9 月 22 日（配給： MGM ）
1994 年 12 月 23 日（配給：日本ヘラルド映画）
監督　スタンリー・キューブリック
主演　ジェームズ・メイソン、スー・リオン
出演　シェリー・ウィンタース、ピーター・セラーズ、
　　マリアン・ストーン、ロイス・マクスウェル
原作　ロリータ（*Lolita* by Vladimir Nabokov:1955）
　　日本語訳　『ロリータ』（新潮文庫）大久保康雄訳

あらすじ：

ある霧の深い日。荒廃したクルティ宅を訪れた作家のハンバートはクルティを撃ち殺す。

ハンバートは数年前、フランスのパリから米国に渡った作家で、フランス詩の翻訳で好評を得ていた。夏を過ごそうと田舎町にやってきた彼は、シャーロット夫人の家に下宿。その際にこの家の娘、ロリータに心を奪われる。そしてシャーロットはハンバートに夢中になる。ロリータとの絆を確保するためにハンバートは夫人と結婚したが、彼の本心を知ったシャーロットは逆上の果てに事故死。そうして義父と娘の奇妙な共同生活が始まった。

２人の関係は近所の噂にもなり、知り合ったクィルティもロリータに興味を示す。彼女を独占したいという欲にかられたハンバートは、外界とロリータとの関係を遮断したい気持ちになり、自動車旅行に連れ出す。モーテルからモーテル……その内にハンバートは、自分たちを尾行する車の存在に気がつく。ロリータは気づく様子がない。そしてある日、インフルエンザで入院していたロリータが、伯父だと名乗る男に連れ出されてしまう。ロリータの行方は分からない。生死さえも分からない。そんな失念の日々を送るハンバートにある日、ロリータから手紙が来る。

ロリータは鉱山の町の貧しい家で暮らしていた。尋ねたハンバートに事情を説明する。クィルティと恋に落ちたが彼に捨てられ、数年ほど前に今の亭主のディックと結婚。子どもを身ごもっていた。事業を興すにあたり資金が必要になったため、ハンバートに助けを求めた。自分と一緒に来るようにとの説得にも応じない彼女を諦めたハンバードは、亡きシャーロットの遺産と自分の資産を与え、元凶であるクィルティの家へ車を走らせた。（そして、冒頭の場面へと戻る）

『ロリータ』
―天を歩け、そして唄え―

辻 本 希 望

今回、僕はスタンリー・キューブリック監督の『ロリータ』を観た。この映画について思うところは色々とあるが、まず違和感を覚えたのが、最後のクィルティを殺害する場面である。なぜ、クィルティの家は荒れすぎているのか。そして、彼の妻はどこに行ったのか。確かに、冒頭のシーンで自宅パーティの後を匂わすような描写（グラスが灰皿代わりになっていた描写）はあったし、彼の妻があの場面にいなくてもおかしくないが、それを差し引いても少し荒れすぎているし、不可解な部分がたくさんあった。

そして、なぜそういうふうな映画になったかと言うと、そもそもこのロリータは、ハンバートの一人称視点のであって（そう言い切ってよい）、語られていないエピソードがあまりにも多すぎるからだと僕は推察する（もしかして、あの劇中のハンバートの日記帳を他人が見たら、こんな映画になるのではないか。この映画自体もハンバートの言動や心理描写を前面に押し出そうという意図があったと思われるが）。もちろん、その人間関係や背景をほのめかす描写や演出は劇中でいくつか出てくるが、先ほど提示した疑問に加え、クィルティがあそこまで執拗にハンバートとロリータを追い回した理由、クルィティとの接点、空白の２年間を含むロリータの行動や心情描写などが明確には描かれていない（しかし、劇中でほんの少ししか出ていないのに、あそこまで気味の悪い存在感を放つクィルティを演じた役者はすごい！）。だから、一見、クィルティが悪役、主人公は葛藤の末に精神崩壊してしまった悲劇のヒーローみたいに見えるのだが、僕は「そんなことはねえ！」と言ってやりたい。その理由としてまず挙げられるのは、客観的に見ると「ロリコンのおっさんが我儘を言っているだけ」という感があるからだ。親子関係にあるとは言え、少し越権してるように思われる。そもそも他人（仮に実の親子であっても親と子は他人）を自分の思い通りにしようという考えはわからなくはないが、浅はかではないかと思う。また、やり方が汚いようにも思う（年齢差とか時代背景はこの際無視します！）。ロリータを手に入れる為に、その母親を利用するという非人道的な手段を使っているのだから、地獄に落ちて当然なような気もする。因果応報とはこの事を指すのだなと感じた。慰めの言葉もない！そういう意味では「可哀そうな人」と言えるのだろう。

そして、この話で本当に可哀想なのは、ハンバート以外の人物ではないだろうか。まず、ロリータの母・シャーロット。この女性は確かに少々やり方が強引な「ウザいおばはん」と言えるが、ハンバートと違って、他人と結びつこうとする時に、ちゃんと真正面から捨て身の覚悟でぶつかっている所は評価できるし、正式な手続きを踏んでいるのではなかろうか。これは、賞賛に値すべきだ。まあ、実際にこのような方がいればいるで、非常に目の当て所に困る迷惑な存在のようにも思えるが。だが、それはハンバート視点で描かれているからで、シャーロット視点で描いたら、ものすごい悲劇ではないだろうか。絶体絶命の求婚に成功したと思った途端、「結婚は偽装で、実は自分の娘を手に入れるためでした」っていうことがわかり、そして、車に轢かれてしまうというオチ。だから、彼女を決して非難してはいけない。（NEVER です！ NEVER ！！…でも実際おったらと考えると、うざいですよね。）

次に、可哀そうな人（その２）として出演中のロリータについて話したいが、これはありのままなのではないか。自分の母親がハンバートに殺された（そう言っても差し支えない！）ことを知らず、まんまと手込めにされてしまう。何も言うことはない、いや、言うようなことがないといっていい。

そして、最後に「クィルティ」ではないだろうか。この人は、まんまと悪役にまでしたて上げられていた。本当に「目も当てられない」。ここからは僕の推論になるが（妄想といっても差し支えないが敢えて申したい）、どこまでの関係を持ったかはわからないけれども、クィルティもまたロリータに捨てられたのではないか。まず、２人の接点だが、これはハイスクール、主に演劇の稽古の時だと言っ

ていい。ただ、ロリータの母親シャーロットがクィルティと接点があったことや、シャーロットが死んでから初めて泊まったホテルでのクィルティの様子を見ていると、もしかしたら、ロリータは昔クィルティと接点があった、あるいはクィルティが一方的にロリータのことを見知っていたのかもしれない。とにかく、演劇の稽古の時にはある種の関係ができあがっていた。そして、なぜあそこまでハンバートとロリータを執拗に追い回したかと言うと、多分ロリータに頼まれたからなんだと思う。演劇の発表会の夜、あれだけ大喧嘩したにも関わらず、どこかに電話した後、大人しくしていたのを考えると、またその後クィルティが２人の居場所を突き止めることができたのを考えると、ロリータの連絡した相手がクィルティだったと考えるのが筋だと思う。病院のシーンでも、男物のサングラスがあったり、ロリータが伝言も残さず連れて行かれたのを見るとほぼ確実ではないか。そして、そのロリータがクィルティと逃げた後、同じような事があったのではないか。それから、結局のところ、ロリータはクィルティのもとを去った。都合のいい時にだけ使われて、飽きたら捨てられてしまったという関係。勿論、そんなことだからクィルティは妻とは別れているし、ショックであれだけ部屋が荒れていてもおかしくないと納得できもするし、最後に逆恨みで殺されてしまうのだから、ある意味、彼こそが悲劇のヒーローといえるのではないか。

ここで感じたことを述べると、やはり物事を見る時は客観的視点が大事なのだなあと心に浮かんだ。僕の友人に「おみくじの恋愛運 MAX やったのに、今年まだ女の子と２回しか喋ってない」っていう奴がいたが、それは、そいつが自分を客観視できていないことの表れだ。おみくじは当たっているのである。お前の恋愛運なんて、所詮 MAX まで出したところで、年に２回女の子と喋れる程度ってことだということだ。つまり、主観にまみれてしまうと、物事を都合の良いように解釈してしまったり、良いも悪いも過大評価、過小評価をしてしまい、本来の自分を見失ってしまう。その結果、見当はずれなことで無為に時間を消費してしまうという事態に陥るということだ。

少々話が逸れてしまったが、僕が言いたいことは別のところにある！あのハーバートは他に友達とか家族とかがいるような描写がなかった。そのことから考えると、少なくとも彼の心の中にはロリータしかいなかったし、心の支え、まさにロリータが人生そのものだったと言える。それが急にいなくなったら、もうあんなにもどうしようがないほどにボロボロになっても仕方がない気がする。勿論、それは自分の心の中でとどめるべきだったのだが、「人生はうまくいかないようにできている」のだ。「こと他人が絡んでくる」状況においてはそう感じる。それはどうしようもないことだ。ダメなものはダメ。しかし、だからこそ、人間は未練がましくじめじめと這いつくばって生きていくしかないと僕は考える。どうせロリータ（ここでは、私たち一人一人の心の支えの意。また、その心の支えを失ったことを指す）のことなんかしばらく忘れることができないのだから、仕方がないのではないか。シャーロットもクィルティもハンバートも人生に絶望して「死んだほうがマシ」っていうような時に死んでいったが、あれはハッピーエンドでもなんでもない！故河島英五も歌っていたが、惨めでも這いつくばってでも「いきてりゃいい」！これは、至極僕の趣味ですが、今の若い子にはもっと河島英五を聴いてほしい。「河島英五 LAST LIVE ～今日は本当にありがとう～（2001 年、２枚組）」は本当に聴いてほしい。これは河島英五が死ぬ前に行った最後の LIVE なのだが、disc1 の曲のオススメは、坂本龍馬の事を歌った歌「天を歩け、そして唄え」、そしてアンコールでお馴染みの「元気だしてゆこう」。disc2 は disc1 とは別のライブであり、半分以上がトークショーの形態をとっているのですが、これがまた最高にいい。

とにかく僕が言いたいのは、「旅にでよう」と。別に旅に出なくてもかまわないが、僕自身も含め、つまらない価値観やプライドがあるから雁字搦めになって息苦しい生き方になってしまっていって、それが人生を息苦しくさせているから、色んな事をすればいいのではないか。死んだり人を傷つけたりしない限り。知らない世界っていっぱいあるのだから、食わず嫌いせず、若いうちはやりたいことやったらいいし、いっぱい失敗したらいい。勿論、自分が相手に一方的に影響を与える立場の時はある程度自分をコントロールしないとダメだが、大抵の失敗は、しても死ぬことはないのだから、もっと自分に正直に生きたらいいし、たくさん失敗してたくさん学べばいい。どんなにボロボロになって、希望を見失っても、それでも心に希望を持ち続けることが大事だと思う。この映画『ロリータ』を観ながら、また、振り返ってみてそのように感じた。